

# 『湖北文藝』と董宏猷

瀬 邊 啓 子

## 〔抄 録〕

文革期の湖北における文藝状況を探るために、雑誌『湖北文藝』を取り上げ、当該雑誌に掲載された作家のなかから、文革後児童文学で活躍する董宏猷の作品について分析を行った。

掲載作品のうち、「知識青年（知青）」の肩書で発表された作品は二作品だけであり、董宏猷の第一作目には知青の肩書がない。この肩書の書き換えと第二作目の作品分析により、『湖北文藝』でも知青による知青文学の創作を試みたことが分かった。

また董宏猷の経歴を確認してゆくなかで、『湖北文藝』においても上海の出版界と同じく作家の出身階級や歴史的背景が審査されることはなく、「創作ができる」ということに主眼が置かれていたことが確認できた。また董宏猷の文革期に創作された作品と『湖北文藝』に掲載された作品を比較することで、『湖北文藝』に掲載された作品には董個人の創作にある特徴が失われており、当時の政策の影響を受けた作品となっていることが分かった。

キーワード 湖北文藝、董宏猷、文革、知青

## 1. はじめに

これまで文革中の上海にて文壇デビューを飾った知識青年（以下、知青）である張抗抗・王小鷹を通して<sup>(1)</sup>、知青の文壇デビューの過程とその人選について分析を行ってきた。そのなかから窺えたのは、(1) 知青であり、(2) 文章が書け、(3) 編集部まで出向くことができ、(4) 編集者の意向を受けた書き直しができる、という条件であった。この条件さえクリアできれば、知青自身の歴史的背景である家庭状況や階級ということは問われなかったのである。このことから、上海においては「知青」自身が上山下郷運動を喧伝することに主目的があり、その文章を書いた知青がどのような人物であろうとも構わなかったという当時の編集・出版方針の状況

が透けて見える。

それでは上海以外の地域ではどのようなものであつたのであろうか。上海同様、知青自身に文章を書かせるということに主眼が置かれていたのだろうか。

ここでは文革期に発行されていた雑誌『湖北文藝』と同誌に「知青」として作品を掲載されている董宏猷に対して分析・考察を加えることで、湖北における知青の作品発表の状況を探ってゆきたい。

## 2. 文革期の湖北文学

文革期の湖北の文学状況について、詳細に分析・紹介しているものはほとんどないと言える。しかしながら、わずかとは言え、湖北の文学紹介をしている文章がある。以下に、新しいものから順に三種類の文章・書籍を見てゆく。

### 1) 江磊「“文化大革命” 期間的湖北文学」（湖北省作協選編『同行——湖北文学60年』創作卷（一）、長江文藝出版社、2009）

この文章によると、文革前半は「とりわけ1971年の前には、湖北の価値のある文学創作はほほない」<sup>(2)</sup> (p.173) とし、70年代になってからの文藝雑誌の復刊・創刊で、息を吹き返したと指摘している。

江磊は文革期の作家のなかで、評価できる作家として、詩人に曾卓、管用和、劉不朽を挙げ、さらに鄭定友、王維洲、黄声孝、李華章、張雅歌を挙げている。文革後期に詩壇に登場した青年詩人としては、高伐林、胡發云、董宏量、張良火、李道林、雷子明、謝克強、熊召政、趙国泰、劉益善などを挙げている。

小説では姚雪垠『李自成』第二卷、碧野『丹鳳朝陽』、安危『我愛松花江』が挙げられ、この三作は比較的代表的な作品として、創作時期と内容について簡単に触れている。なかでも姚雪垠『李自成』第二卷は1982年に茅盾文学賞を受賞していることもあり、文革期の「最高作品の一つ」(p.175) とまで称している。また碧野『丹鳳朝陽』は、文革初期に一度は創作の中断を余儀なくされたが、十数年の歳月をかけて完成された労作であり、文革期における「湖北文壇の長編小説の主な収穫」(p.175) と位置付けている。

ほかに李曉明『追窮寇』、洪洋『長江的黎明』、劉亞洲『陳勝』、王精忠『万里戦旗紅』など、短編小説に劉富道、杜為政、蘇群、李德復、李爾綱、鄧玉梅、李声明などが挙げられている。報告文学では李建綱、毛志英、曾德厚、散文では劉益善、楊書案、張良火、李德復などが挙げられているが、いずれも作品・人名の列挙のみで、全体的な傾向を簡単に述べるに止まっている。

参考として、江磊の挙げた作品の出版状況についても挙げておくと、李曉明『追窮寇』（広東人民出版社、1973.11）は50万冊発行している。しかし洪洋『長江的黎明』（湖北人民出版社、

1978.8) や劉亜洲『陳勝』(湖北人民出版社、1977.11) は、出版企画は文革期に行われたものかもしれないが、実際の発行時期は77年以降となっている。王精忠『万里戦旗紅』(湖北人民出版社、1976.6) については、77年までの出版となっているものの、全体的に文革終息間際に出版されていることが分かる。

2) 湖北省作家協会編『湖北文学五十年——湖北省作家協会成立五十周年紀念』(2003)<sup>(3)</sup>

本書では「第一編 湖北文学五十年」に、「第三章 “文革” 的黑暗時期, 大苦悶孕育大時代」として文革期の文学状況について、4頁の紙幅を割いている。ここでも江と同じく「“文革” 前期(1971年の前)には、文学創作はほぼ空白であった」<sup>(4)</sup>とし、70年代に入ってから雑誌『湖北文藝』や『武漢文藝』<sup>(5)</sup>の復刊・創刊を受けて、ようやく文藝作品の出版が行われるようになったと述べている。

ここでも数名の作者を紹介している。まず部隊の作者として劉富道を挙げ、杜為政とともに短篇小说に言及している。次に、姚雪垠の『李自成』第二巻の創作、碧野の『丹鳳朝陽』、安危(本名、王寄玄)の『我愛松花江』を述べる。なかでも安危の作品については半頁以上にも互って言及している。まずはその創作期間が長く、1957年から始まり、76年に改訂され、79年ようやく出版されたことに触れ、松花江畔臥龍村の初級農業合作社を舞台に、丁万紅と楊小鳳の若い恋人たちを描いたものであることを紹介している。そして階級闘争や2つの路線闘争を反映しているものの、それに捕らわれるのではなく、農村の四季が詩情豊かに描かれていると評価している。その上で、『我愛松花江』の第二部の原稿が存在しているにも関わらず、出版されていないことに遺憾の意を表している。

最後に詩歌の創作について触れ、鄭定友・李華章・黄声孝・江柳を挙げている。後者二人については、毛沢東への追悼詩についてもタイトルのみ挙げられている。次に郷土詩人として管用和、曾卓の地下創作について触れ、特に後者の曾卓については半頁ほどを割いている。

曾卓の地下創作は新時期に大きな影響を与えたことを指摘し、まずは曾卓の経歴を簡単に紹介している。とくに“胡風反革命集團”とされたことで、文革終息まで作品発表の場を奪われたこと、“四人組”が倒されたことで作品の多くが日の目を見たことを述べ、多くの部分をこの政治状況に左右された「悲劇」的側面に言及することに割いている。わずかに、最後に1970年に書かれ、79年に発表された「懸崖边的樹」(『詩刊』1979年第9期)を紹介するのみであるが、作品の評価については一切触れられていない。

最後に新人詩人として、高伐林、王家新、董宏量、張良火、李道林、雷子明、張雅歌、謝克強、熊召政、趙国泰、劉益善、胡発云の名前を挙げている。ここに名前が挙がっている青年詩人は江の挙げたメンバーと、ほぼ同一である。ここでは熊召政の作品のみ具体的な言及が行われているが、全体的にあっさりとした紹介である。

3) 湖北省文学藝術界聯合会編著『湖北文藝50年』（長江文藝出版社、1999）

本書では「第一章 文学」の「第四節 詩歌」に、「二、“文革”十年的詩歌」という項目を設けているものの、1頁にも満たない内容となっている。鄭定友・李華章・黄声孝・張雅歌の作品名をわずかに挙げ、江柳と黄声孝の毛沢東追悼詩に触れているのみである。最後数行で、文革後期に醸成された青年詩人に、高伐林、董宏量、張良火、李道林、雷子明、謝克強、劉益善のみ挙げ、「彼らはその後新时期湖北詩壇の中堅の力となった」<sup>(6)</sup>と締めている。

同書では、「第二章 戯劇」の「第二節 劇本創作」でも、「二、“文革”十年的劇本創作」とし、1頁強の説明を加えている。しかしここでは“样板戲”や“一花独放”からは逃れられず、75年になって、ようやく漢劇『高山頸松』（余秉国作）、楚劇『追報表』（徐国華、李光輝作）が演じられたことが述べられている。そして前者には“样板戲”や“三突出”といった文革当時の文藝理論を踏襲していることが見受けられると指摘している。その一方で、漢劇『破山貨郎』（蔡漢華作）は、74年に上演したところ、「劉少奇の名誉回復」と見なされ、“大毒草”として批判を受けたことや、この作品は78年になって、湖北省文化局からようやく名誉回復をされたことが、簡潔に述べられているのみである。

このように文革期の湖北の文藝状況に関しては、どんな作家がいたのかということが紹介され、その概要については簡単に触れられてはいるものの、詳細な分析は行われていない状況にある。江磊「“文化大革命”期間的湖北文学」については、曾卓の地下創作を評価するなど、概ね『湖北文学五十年』の内容を踏襲しており、目新しさは感じられない。ただし雑誌『湖北文藝』に掲載された作品をいくつか挙げることで、『湖北文藝』が文革中に湖北文藝に対して一定の役割を果たしていたことをより明確にしている。この点で、ほかの2つの紹介とは異なっている。そして「十年の“文革”は湖北文学からすると、疑いなく暗黒であった。しかし前述したように、老作家と文壇の新鋭たちはこのつらい歲月のなかで力を蓄え、春がほどなく訪れるというときに、湖北の文学創作は溢れる活気を巻き起こそうとした」<sup>(7)</sup>とし、文革中に潜伏していた文藝創作が文革終息間際に徐々に姿を表してきたことを示す言葉で、文章を締めくくっている。

### 3. 雑誌『湖北文藝』

雑誌『湖北文藝』は、1973年5月に創刊<sup>(8)</sup>された。発行は湖北省武漢市郵政局である。『湖北文藝』編集部による編集・出版で、住所は武昌紫陽路215号と記載されている。「編者的話」（『湖北文藝』1973年3月創刊号、p.80）には、工農兵業余作家の作品を重視すると述べられている。創刊号では口絵に雷鋒の絵がかかった部屋で雷鋒の物語を聴く子供たちの写真、扉に毛沢東が1949年9月23日に雑誌『人民文学』に贈った題字「希望有更多好作品出世〔より多くの

佳作が世に出ることを望む]」が掲載されている。

1978年5月号より、『湖北文藝』は『長江文藝』(1949年6月創刊<sup>(9)</sup>、1966年停刊)に名称を変更した。ただし当時は、雑誌『長江文藝』の「復刊」と表されるのみであった。しかし文革時の『湖北文藝』の前身は『長江文藝』と位置づけられ、『長江文藝』の復刊は『湖北文藝』を改称したものとされている。このことは劉益善「『長江文藝』, 新中国文学的一条河流」(湖北省作家協会編『湖北文学五十年』、2003)の文章からも裏付けられている。

『長江文藝』は“文化大革命”によって1966年6月に停刊、1973年5月当時の湖北省革命委員会が批准し、『湖北文藝』雑誌を発行。隔月刊で、編集部メンバーは主に『長江文藝』の元編集で組織された。『湖北文藝』は1978年5月まで発行され、『長江文藝』に改められた。当時は復活とされ、『湖北文藝』は全部で32期出版された。唯物主義から歴史を扱うと、この32期の『湖北文藝』は、『長江文藝』が特定の条件のもとでの短期間改名したものというべきである。<sup>(10)</sup>

劉はつづけて『長江文藝』の変遷に関して、次のように述べている。

『長江文藝』は1949年6月18日に創刊され、華中文聯の指導のもと、於黒丁、李蕙、兪林、李季の4人を編集委員とし、創刊号は鄭州で印刷されたが、編集部は5月には武漢に到着しており、第2期は武漢で印刷された。『長江文藝』は解放軍の南下に従い、砲声とどろく中で誕生したのである。(中略)『長江文藝』は1953年に中南作家協会の機関刊行物となり、その後中南作協が中国作家協会武漢分会と改称し、『長江文藝』は武漢分会の機関刊行物となった。1985年5月、中国作家協会湖北分会が単独編成され、『長江文藝』は湖北分会の機関刊行物となる。その後、中国作家協会湖北分会が湖北省作家協会と改称し、『長江文藝』は湖北作家協会の機関刊行物となった。<sup>(11)</sup>

劉の文章では、『湖北文藝』は「1978年5月まで発行」とされているが、実際には5月に発行された5月号から『長江文藝』と改称されており、『湖北文藝』は78年4月の発行が最後となっている。

また劉益善は上記文章のなかで、各年代の佳作について触れているが、『湖北文藝』時代の作品は一切挙げていない。『長江文藝』で活躍した作家のなかでは、熊召政(p.158)が知青のときに、『湖北文藝』(1973年9月、第3期)に政治抒情詩「獻給十大歌」を発表し、注目されたことに言及するのみである。

掲載作品は、創刊号「編者的話」(p.80)の記載通り、工農兵業余作家の作品が目立つ。詩歌を中心とした作品群が掲載されているが、湖北小曲などの湖北地区の文化が反映された作品

や「方言快板」などの方言を用いた作品も掲載されている。その一方で、文革期の言説を反映させた政治的な文章の掲載も目立つ。つまり文革期特有の雑誌の体裁を取っており、純粋な意味での文藝誌ではなかったと言える。

1975年第1期の目録には、「『湖北文藝』は1973年5月に創刊して以来、すでに10期が発行された。今年は引き続き隔月刊で出版する。編集作業を改善し、刊行物の品質を向上するために、また工農兵へのサービスをよりよく行うために、広範な工農兵読者のみなさまに刊行物への意見や要求をわたしたちに書いてくださるよう切に望むものである」<sup>(12)</sup> という手紙文をしたためた紙が封入されている。この紙に意見を書き、そのまま折り込むだけで、切手も不要な形で投函できるようになっており、75年の段階で「読者」を多少なりとも意識していたことが見てとれる。

1977年第4期から3号に互って毎号、78年1月から月刊に変わり、全国に向けて発行されることが案内されている。その上で、「引き続き毛主席の偉大な旗印を掲げ、毛主席の革命文藝路線を貫き通し、英明なるリーダー華主席による原則に沿って国を治めるという戦略的決定策に沿って、組織の指導的労働を真剣に成し遂げ、新たな作家を積極的に育て、社会主義の文藝事業を発展繁栄させるために努力奮闘する」<sup>(13)</sup> とし、予約購読と投稿を呼び掛けている。

上記のように、『湖北文藝』は78年1月から全国発売となったことから、それまでは湖北地域に限定した地方雑誌だったということが窺える。

陳齡「《長江》文学叢刊憶事（『湖北文学五十年』）」から、『湖北文藝』の編集者には沈毅（詩人）<sup>(14)</sup> や黄泉清<sup>(15)</sup> の名前が確認できるが、ほかのメンバーは不明である。ただし「湖北省作家協会五十年大事記」（『湖北文学五十年』p.395）にも『湖北文藝』の編集部が元『長江文藝』の主要な編集メンバーから構成されていたという記述があり、劉益善が記載したように『湖北文藝』の編集は『長江文藝』の編集者とほぼ同一であると考えるのが妥当であろう。

## 4. 董宏猷

### 4.1 董宏猷の経歴

董宏猷は1950年4月29日に生まれた。以下に、『湖北文藝作家略伝』（張政軍主編、武漢大学出版社、1992）を参考に、董宏猷の経歴を見てゆく。

董宏猷は湖北省咸寧県長寿畷（現、汀泗郷）の出身で、鄂南山区で幼少期を過ごす。また幼少期には父親の愛情を得られず<sup>(16)</sup> に、母方の祖母、母、姉<sup>(17)</sup> と苦しい生活を送っていた。早熟な子供で、読書や絵を描くことを好んでいたが、経済的にひっ迫していたため、9歳のころから長江べりの埠頭で荷車を引いていた。

12歳で自作の詩集を作るなど、詩作を好んで行っていた。そのほか、美術や音楽も好んでいた。文革期には上山下郷で生産隊に入るも、知青として非常に苦しい生活を送ることになった。しかしそのなかでも詩作を続け、1972年に地方紙にて処女作を発表した。現在に到るまで『詩

刊』などの新聞・雑誌で400以上の詩歌を発表している。

1977年に華中師範大学中文系を卒業し、村落にて教師となり、小説の創作を始めたというが、74年第4期の『湖北文藝』に「工分問題」という小説を発表していることから鑑みると、小説の創作開始時期は文革期と考えられる。1980年に短篇小説「雪花飄飄」を発表後、注目を浴びるようになる。82年に児童文学の創作を開始し、「吸力」が『児童文学』1982年優秀作品賞を受賞するなど、児童文学において目覚ましい活躍を見せるようになる。

1983年に武漢市総工会『主力軍』雑誌社の編集となる。雑誌の性質上、ルポルタージュも手掛けるようになり、新疆に取材した「天山回答你」(『主力軍』1986年第1期)では全国工人報刊優秀作品賞を受賞し、85年にはルポルタージュ文学「王江旋風」(『少年文藝』1985年第11期)で、湖北省児童文学優秀作品賞を受賞している。

1988年に雑誌『芳草』編集部に移り、翌89年に代表作『一百個中国孩子的夢』(江西少兒出版社)を刊行し、好評を博す。同作は91年に台湾でも出版され、台湾でも評価を受けるようになる。董宏猷は中国作家協会員、中国散文詩学会員、中国作家協会湖北分会理事などさまざまな役職を務めている。

次に『湖北作家辞典』(湖北省作家協会編、1996)を参考に経歴を見てみると、董宏猷は武漢生まれで、湖北省咸寧県に本籍があるという。77年に華中師範大学中文系を卒業後、中学の国語の教師や編集者を経たのち、武漢市文聯の専業作家となった。1972年に処女作を発表し、多くの作品を世に出している。その作品のなかでも、『一百個中国孩子的夢』は中国図書賞、台湾の優秀児童図書金龍賞など多数の受賞が記載されていることから、同作が董宏猷の代表作と考えられていることが分かる。

董宏猷の作品発表時期については、上述の2冊はいずれも1972年としているが、董宏猷『深巷明朝開杏花』(武漢出版社、2006)では1971年とする。

董宏猷・董菁『扛着女兒過大江——最初的感動』(人民文学出版社、2001)には、『一百個中国孩子的夢』が小学1年生になったばかりの娘董菁の夢をヒントに書かれたことなどが述べられているが、文革期に起こった悪夢についても記載されている。

1966年夏に文革が始まったころ、董宏猷は学生会の主席であり、すべての科目で80点以上を取っていた優秀な学生であった。高校受験の準備をしていたころに、董宏猷は突如“修正主義黒苗子”とされ、それとともに出身がよくないとして“黒五類”となってしまったのである。「血統論」が幅を利かせ、労働者階級出身であるというだけで、昨日までおとなしかった学生までが顔色を変えて担任の先生を殴る、そういったことが董宏猷の身近でも起こるようになっていた。

そんななか、董宏猷16歳のときに、悪夢が起こった。それは、自分にとって親しいと感じていた人たちが書いた“打倒修正主義黒苗子董宏猷”というスローガンにあった。このスローガンが大字報に掲載され、恐怖や苦痛などを味わうことになったのだ。しかしながら、董宏猷に

はなぜこのような事態に陥ったのかは分からなかったようだ<sup>(18)</sup>。

董宏猷「茅棚詩篇」（董宏猷主編『我們曾經年輕——武漢知青回憶錄』武漢出版社、1996）によると、董宏猷は1968年12月1日、武漢市の最初に上山下郷運動に参加した知青として、漢陽県侏儒区合豊公社百賽大隊四小隊に入り、戸籍を農村へ移した。それは董宏猷の母校である武漢市四十四中に上山下郷を求める大字報が貼られ、講堂の壁にも「蘿蔔鹹菜，要到百賽〔大根漬物、百賽に来たれ〕」（p.105）というスローガンが貼られたからだという。

文革以前、董宏猷は四十四中の中学生会主席であり、共産党青年団員であった。また上山下郷する前には学内の“復課鬧革命領導小組〔授業再開革命推進リーダー・グループ〕”のメンバーであった。漢陽県という労働条件が厳しく、かつ吸血虫の伝染病発生エリアに行くということは、当時のより厳しい土地へ進んで行くという精神に合致していたため、董宏猷も百賽大隊へ行くということを選択した。

董宏猷の説明では、百賽大隊は6つの生産隊に別れ、漢陽・漢川・沔陽の三県に跨る江漢平原に位置し、漢陽県西部にある燕子山の両翼に展開されていた。ここでは稲や棉が生産されていた。董宏猷の属していた生産隊では、60名ほどの人員がおり、400畝余り（約2700 a）の水田と、200畝余りの棉畑の栽培が仕事であった。一人当たり平均10畝（約67 a）の田植えをし、水稻は二期作を行っていた。棉畑では、小麦や大豆、ゴマなどを間作し、一年中暇がない状態であった。それでも農閑期と見るや、水利工事に駆り出される。ここでは知青たちは労働力として充てられた。董宏猷は生産隊に入った翌日にはもう大きな木桶に入った肥を運び、苦勞したことを、「茅棚詩篇」にて詳細に述べている。

董宏猷が「知青」となったこの年、董宏猷の姉と弟も同時に農村へと移って行った<sup>(19)</sup>。董宏猷の荷物は本と詩集であったという<sup>(20)</sup>。董宏猷はこのころソ連の詩人であるウラジミール・マヤコフスキー（1893-1930）を好んでいた。董宏猷の荷物の重さやバイオリンの演奏に、農民たちは董宏猷に対して“反革命”の疑いを持つようになった。さらには、バイオリンの演奏が何かの電信であるとして「スパイ」の嫌疑までかけられ、周囲ではそのことが噂になっていた。このことを教えてくれた知青が、のちに董宏猷の妻となる女性易文英であった。

易文英は19女中（武漢市の重点女子中学校）から百賽大隊へ来ていた。元紅衛兵で、68年に高校を卒業している。彼女は董の属していた大隊唯一の高校生でもあった。そのため大隊の民間学校で教鞭を執っていた。字が大変うまく、董宏猷の作品を董の代わりに書いてくれていた。また彼女は大隊が作成していた“双搶戦報”という謄写版印刷の小型新聞の記者であり編集者でもあり、董にとっての初めての編集者でもあった。就職の募集に何度も推薦されたが、政治審査で落とされていたという<sup>(21)</sup>。

董宏猷にとって、文革期に農村で過ごしたことはプラスに働いた。それは“黒五類子女”であれ、“修正主義黒苗子”であれ、貧下中農の人たちは蔑視することなく、一人の人間として扱ってくれたからだ。董宏猷は大隊にあっても、詩歌の創作を続けていた。“順口溜”という語呂

よく口ずさめる民間芸術の一種を用いて、大隊のために豚を飼うことへの注意を促す宣伝文句を作成してもいた。こういった“順口溜”は農民受けがよく、董宏猷にとって最初に発表された作品ともなった<sup>(22)</sup>。

董夫妻はともに所謂“老三届〔66,67,68年の中学・高校の卒業生〕”であり、同じ生産隊に入り、さらにはその生産隊が運営していた民営の小学校で教師をしていた。文革期間中に“工農兵學員”として妻は武漢師範学院（現、湖北大学）中文系に、董は華中師範学院（現、華中師範大学）中文系に進学をしている<sup>(23)</sup>。文革当時は大学進学のための推薦を得ることは非常に難しいことで、夫妻ともに進学の間際を得ているということは稀有なことであった。董宏猷はこの稀有な機会を、1974年に得ることができた。このとき漢陽県からはたった一人しか進学ができず、董宏猷はその幸運を得た一人となったのである<sup>(24)</sup>。

方方「我認識の幾個武漢人」（『武漢人』浙江人民出版社、1997）には、興味深い董宏猷の記述がある。方方の紹介では、董宏猷は武漢市漢口の長堤街で生まれた。長堤街はもともと5kmもの長さがあった袁公堤が堤防として不要になったとき、堤防の両側に住民が住みついてできた通りだという。上述のように、董宏猷は子供のころに荷車を引いていたというが、方方の説明では弟とともに漢水橋を渡る人の荷車を押す手伝いをしており、1回の駄賃は1角とのことであった。

方方の目には、董宏猷は複雑な家庭環境で育ってきたように映っていた。彼女は董宏猷が中学の教員をしている間もつらそうで、抑圧されているようだと感じていたが、当人は人にはそういった様子を見せなかったと表している。その上で、「董宏猷がその場にさえすれば、笑い声や歌声があり、友情があり、思いやりがあり、助太刀があり、豪気に満ち満ちているかのようだ<sup>(25)</sup>」とし、董宏猷の兄貴分然とした性格や朗らかさを述べている。

ところで『湖北文藝』誌上で活躍していた董宏量（1953年10月武漢生まれ）は董宏猷の弟である。方方によると、董宏量は兄の影響を受けて小さなころから詩を発表してきたという<sup>(26)</sup>。文革期に活躍した青年詩人の名前として董宏量は必ずと言ってよいほど挙がっているが、董宏量が18歳であった1971年に武漢鋼鉄（以下、武鋼）に入ったことも文学に長く携わるきっかけとなった<sup>(27)</sup>。このときは冶金修理場に配属され、高炉や平炉の修理に携わった。最初に正式な出版物に発表した詩歌は「擺開巨杯接紅酒」（『長江日報』1973.10、日付不詳）というわずか八句の詩だった<sup>(28)</sup>。『扛着女兒過大江』（p.62）にも、弟の処女作が発表された記念に撮影された董兄弟の写真が掲載され、「長江べりで荷車を引いていた子供二人が、その後多くの詩歌を“引き出した”<sup>(30)</sup>」とコメントが書かれている。董宏量自身は「知青のときに詩を書くことを学んだ。それというのも、下放した場所では腹いっぱい食べられず、知青たちはみな水利や鉄道の修理に派遣されていたからだ<sup>(31)</sup>」とし、知青のときに創作活動を始めたことが、武鋼でも創作に携わるきっかけになったことを明かしている。82年より雑誌『武鋼文藝』<sup>(29)</sup>の編集部に異動になり、半年を編集に、半年を創作にあてるようになった。

『湖北文藝』にも董宏量は詩歌を発表しているが、その肩書は「武鋼工人〔武鋼労働者〕」であったり、「工人」であった。つまり労働者による詩作という立場を明確にした形を取っており、兄とは違った立場で作品を発表していた。

#### 4.2 『湖北文藝』誌上の董宏猷作品

上述のように、董宏猷の文壇デビューは『湖北文藝』誌上ではなく、文革後期の早い段階である1972年（71年）である。それでは、すでに文壇で活動していた董宏猷が『湖北文藝』誌上ではどのような作品を発表していたのだろうか。

董宏猷が『湖北文藝』に最初に登場したのは、1974年第1期である。そのときは、漢陽県文藝宣伝隊の徐金海<sup>(32)</sup>との合作で、漢陽県合豊公社百賽大隊の「董宏尤」の名で登場している。この董宏尤が董宏猷であることは、「猷」と「尤」が同音であることに加え、74年第3期に再び登場したときに、漢陽県知識青年として徐金海・董宏猷の名前で「深山賦」という詩歌を発表していることから分かる。

第一作と二作目はいずれも合作による詩歌であるが、第一作目は「唱給春耕人物〔春耕する人に詠う〕」（赶五句）という題目で、いずれも「給党支部書記〔党支部書記へ〕」と具体的な肩書を置き、その人物に対して、七言五句の定型詩を書くという形式を取っている。冒頭と結びには「曲頭」と「曲尾」を置くが、いずれも同一の形式となっている。内容は単純で、春にそれぞれの人物が労働する様子を描いている。ところどころに「抽空挑灯学《毛選》〔手すきのときに灯火に向かって『毛沢東選集』を学び〕」（給飼養員〔飼育係へ〕の第二句）や「今晚学习《实践論》〔今晚『实践論』を学習す〕」（給政治夜校輔導員〔政治夜学指導員へ〕の第一句）といった政治学習として毛沢東の論著を学ぶという文言が入っている。

ここで、「給知識青年〔知青へ〕」という句を見てみると、以下のように詠われている。

給知識青年：

鐵錘一揮山直顛、	ハンマー振るえば 山揺れる、
鋼釘指處頑石軟、	たがね刺せば 石もろく、
你把梯田往上壘、	段々畑 上へと築けば、
梯田送你上雲天。	段々畑が高い空までいざなう。
登高更覺天地寬。 <sup>(33)</sup>	高く登れば 天地の広さ より感ず。

七言五句の定型にするのみではなく、韻も踏んではいるが、取りたてて印象に残るような作品とはなっていない。

二作目は、同じく徐金海との合作であるが、「漢陽県知識青年」という「知青」の肩書を前面に出している。「広闊天地出詩篇〔広い天地に詩を発表す〕」という欄が設けられ、その冒頭の作として徐金海と董宏猷の作品が掲載されている。この欄にはほか4名の作品が掲載されているが、「浠水県女知識青年 周阿明」「随県知識青年 李聖強」「浠水県女知識青年 万東明」

「漢陽県知識青年 鄧猷武」というメンバーで「知識青年」たちが書いていることが強調されている。また『湖北文藝』の創刊号から浠水県の労働者や知識青年が作品を発表していることから、浠水県には原稿依頼しやすい条件があったことが窺われる。

では「深山賦」だが、どのような詩歌なのだろうか。「深山賦」は、一作目とは異なり自由詩の形態を取っている。ただし頭と終わりを四句に揃え、間三節を十二句に揃えており、全体に四句または二句がセットになるように組み合わせ、リズムを揃えている。とくに間の十二句はリズムが同じになるように、なるべく揃えるように組み合わせている。

その中でも、とくに頭と終わりは意識的に揃えられており、十二句の冒頭部は下記のようにリズムを揃えている。

進山那一天、            山に入ったあの日には、  
紅日正東昇。            真っ赤な太陽 まさに東から昇らんとす。

進山那一夜、            山に入ったあの夜には、  
松濤響不停。            松風響いて止まりもせず。

進山快一年、            山に入って早一年、  
歩歩有鬭争。<sup>(34)</sup>        一步一步と鬭争す。

最後の二句では、「深山“深”，〔深山“深し”〕」のあとに、「貧下中農情意深！〔貧下中農情深し〕」「貧下中農仇恨深！〔貧下中農恨み深し〕」「貧下中農對咱教育深！〔貧下中農我らへの教育深し！〕」と受け、最後の句のみリズムを変えているが、同じリズムで読めるように構成されている。

また「上山接受再教育，才知深山“深”！〔山に上って再教育を受け、ようやく深山の“深さ”知る〕」という句があるように、知識青年たちが山に入って、深山で貧下中農たちに迎えられ、そこで暮らす様が描かれている。さらには「比咱爹娘還要親〔父さん母さんよりもずっと親しい〕」との句で、知青たちが深山で歓迎されているという様子が詠われ、時局に合わせて上山下郷運動を美化し喧伝するという性格を持つ知青文学となっている。

つまりこの作品においては、「知青」が創作したという前提が必要であり、第一作目とは肩書を変えて、わざわざ「知青」であるという主張がなされているのである。ここからは上海と同じく、「知青」が上山下郷運動を美化して描くことが求められた、ということが窺える。

董宏猷の『湖北文藝』における三作目は詩歌ではなく、小説である。その小説は、1974年第4期に掲載された「工分問題」で、文革終息までよく用いられていたスローガンや毛沢東を始めとする重要人物たちの発言をゴシック体で表記する方法を踏襲している。

ところで、董宏猷の第一作目から三作目までは、74年の第1期，3期，4期と一気に掲載されたという印象を受ける。続く第四作目が1975年第3期と少し間を開けていることから、連続

して掲載されたという印象を受ける。可能性としては、いくつかの原稿を一度に受け取っていた編集部が数回に分けて掲載したのではないかということが考えられるが、この辺りの事情は不明である。

小説「工分問題」も「漢陽県知識青年」の肩書で発表されている。生産隊を舞台にした小説で、武漢方言である“麼事〔何〕”や“為麼事〔どうして〕”、語気助詞の“吵”の使用が見られるが、方言に対する注記はなされていない。つまり読者はこれらの方言が理解できるという前提となっていたことが分かり、ここからも『湖北文藝』が湖北や武漢の読者を対象にしていたことが窺える。

作品そのものは毛沢東主席の革命路線を推し進めようとする主人公周強林が劉少奇のブルジョア反動路線に対抗しつつ、わずか数日先のメーデーまでに田植えを済ませるという難しい課題を何とか実現させようとするという内容になっている。

ここでは第二作とは異なり、「知青」の立場を謳ってはいるものの、知青たちの様子は描かれていない。またタイトルにもなっている「工分〔労働点数〕」はこの労働点数をごまかして、甘い汁を吸おうとする周昌を登場させることで、劉少奇が推し進めた“三自一包”や“工分掛帥”などの修正主義反動的な政策を批判するとともに、ごまかしを行って自分だけ得をしようという人物への批判を行っている。

主人公の周強林は作品舞台である周塋大隊の生産隊長周老大の弟である。短気で物事をずけずけと言う兄と異なり、寡黙で聡明な弟は中学を卒業すると、農業に従事するようになる。そのころ強林は労働点数を付ける係を担当していた。しかし何か気がかりな様子をしており、夜には毛主席の書物を読みふけり、深夜まで書物を手放さない。その様子を見て、兄が何か心配事があるのかと尋ねると、王副隊長は毛主席が話していることと違うことを行っていると指摘をした。兄は弟には余計なことをするなといさめたが、結局強林は王を糾弾する。しかしこのときは強林には後ろ盾が何もなかったことから、王の権力の前に敗れるという体験をすることになる。

そして文革が始まると、当時民兵連長だった強林は青年たちをまとめて、造反を行い、劉少奇の路線批判を展開するのである。一方の王も強林を“反党分子”として打倒しようと目論むが、双方激しい闘争の末、王の陰謀は打ち破られる。そして強林は大隊の革命委員会の責任者となり、その後大隊の党支部書記に選ばれる。そして大隊を率いて、全県のなかでも「農業は大寨に学ぶ」という先進的な例となるほどまでになったのである。

この作品では強林は文革期の英雄であり、“三突出”の典型的な人物と言える。また兄がメーデーの前に田植えを終えるために労働点数を上げることで対処しようとしたことに対し、異を唱える。それは劉少奇の政策を再び持ち出すということでもあったからだ。

強林は独断的な人物としては描かれてはいない。兄の対処方法に反対するにしても、まずは党支部の委員たちと話し合い、さらには周金伯という大隊の参謀とも言うべき、貧農たちから

支持されている人物とも話し合う。老人たちに教えを請い、社員たちと話し合う。強林は政策に対しても真面目で、真摯である。

この作品には地主が登場しない。王副県長は強林の敵として描かれているものの、周昌も「上中農」であり、地主からひどい扱いを受けたのは貧下中農と同じとされている。結局、強林の「一日中個人の利益を考えてはいけない。資本主義のその道は通じてはいないんだから。貧下中農に付いて一緒に社会主義の光り輝く道を歩もうよ！」<sup>(35)</sup>という言葉の聴いて、ちょっと考えさせてくれと、周昌の反省している様を描いている。

そしてラストシーンでは太陽が出てきて、社員たちを照らす。そこで強林は兄の肩を叩いて、大寨に学び、毛主席の革命路線を推し進めることを、改めて決意する。そして兄はそのことに同意しながら、にわかには弟の成長を感じるのである。

本作は可もなく不可もないという印象を受ける。文革後期の小説によくある、主人公がいくつかの障害を乗り越えて、革命的な事業を成し遂げようとするというストーリー展開を取られてはいるものの、過去のエピソードとして語られる王副県長を除くと「敵」として描かれる人物はいない。またこれから毛主席の革命路線を堅持してゆくという決意を持って物語が終了するのだが、メーデーまでに田植えを終えるというミッションが無事に終了したという場面は挿入されていない。婦女隊長の周小梅率いる女性たちが、夕飯後に田植えをするという方法で人手不足を解決することを考え、金伯が田圃の水かき用の機器を製作することで彼女たちの労を減らそうとする。このように目標が達成できる可能性を示唆する場面が描かれているのみとなっている。

ラストシーンの希望ある未来を示したことで、おそらく強林たちはみなで力を合わせて、メーデーまでに田植えを終えるという難題を解決しただろうという予測は立つ。しかし文革後期の小説のなかではこの難題を達成したという場面が示されないことで、強林の英雄的な側面が軽減されてしまっていると言えるだろう。また“三突出”から見た場合でも、強林の形象は「突出した英雄」というよりは人間的と言える。この点から文革期の作品としては、典型的なスタイルを取りつつも、極端な形式とはなっていないと言える。

第四作目・五作目はいずれも「工農兵學員」との肩書で発表されている。四作目は趙国泰<sup>(36)</sup>と張永柱<sup>(37)</sup>と3人による合作で、「銀色的書簽——寫在學習無產階級專制理論的熱潮中〔銀色のしおり——プロレタリア專制理論を学習する熱気のなかで書きおろす〕」（『湖北文藝』1975年第3期）という詩歌である。

董宏猷「工分問題」が掲載された『湖北文藝』（1974年第4期）に、「公社人物剪影（詩十三首）〔公社人物のある一面〕』という趙国泰の詩歌が掲載されている。この時の趙の肩書は、董と同じく「漢陽県知識青年」である。また趙は董宏猷とともに1977年に華中師範学院を卒業していることから、二人は同時期に華中師範学院にて学んでいる。この二点から趙と董は比較的近いところにいた人物であったことが分かる。



第二節目には、

接呵接，把學習與鬥爭接在一起，	つなげやつなげ、学習と闘争を一緒につなげ、
連呵連，把課堂與車間連成一線，	つなげやつなげ、教室と工場 <sup>こうば</sup> を一つにつなげ、
接呵接，把理論與實踐接在一塊，	つなげやつなげ、理論と実践を一緒につなげ、
連呵連，把紅心與工農連成一片。	つなげやつなげ、赤い心と工農を一つにつなげ。

と、リズムが同じ句を配し、文革の理念と工場などの実地を行う場をつなげてゆくことを強調している。同じ言葉やリズムを繰り返すことで、ある意味で“順口溜”のように口ずさみやすい詩歌となっている。

第六作目は、1976年第3期に「堅決擁護毛主席、党中央の英明決策〔毛主席・党中央の英明なる戦略的政策を断固として擁護する〕」という欄に掲載された「守衛広場寫春秋——獻給保衛天安門広場の戦友〔広場を守り歳月を過ごす——天安門広場を警備する戦友に献ず〕」である。こちらは張永柱との連名となっている。この1976年第3期には、華中師範学院中文系七四級工農兵學員集体創作とする「教育革命行進曲——寫在反擊右傾翻案風的火線上」という詩歌が掲載されている。董宏猷が華中師範学院中文系に74年に入学していることを鑑みると、この集団創作メンバーの一人に董宏猷が入っていると考えるのが自然であるが、集団創作の構成員が不明であるため、ここでは論じないことにする。また五作目の教育革命を詠った詩歌が前号に掲載されていることから、この集団創作のなかで五作目が創作された可能性も考えられる。

「守衛広場寫春秋」は十年前北京に行き、毛主席が天安門上から紅衛兵たちに謁見を行ったという情景から始まり、天安門を警備する衛兵たちの視点から人々が衛兵たちを後押ししてくれているという心情を詠っている。

四句を一節にした七節の詩歌で、「走資派還在走〔走資派はまだいるぞ!〕」という部分のみゴシック体を施しているが、この文言が含まれた「戦闘——以我們的勝利結束，／警惕——走資派還在走!〔戦闘は、我らの勝利を以って終了す／警戒せよ、走資派はまだいるぞ!〕」(p.9、以下の句同じ)という部分は、1つ前の76年第2期に掲載された「新課堂」を想起させる。また途中の句では、「衝過去! 压過去! ——／勝似当年的殊死搏闘!／衝過去! 压過去! ——／整個階級在我們身後!〔突き進め! 押し込め! ——／あのとときの命がけの戦いのように勝て!／突き進め! 押し込め! ——／すべての階級が我らの後ろにいるぞ!〕」と置き、「用炮火拭擦槍刺吧，／一輩子守衛広場寫春秋……〔砲火で銃先の剣を拭おう、／一生広場を守り歳月を過ごそう……〕」という言葉で占め、荒々しいと言うほどの勇猛果敢さで衛兵たちが広場を守っている情景を描き出している。このようにテーマに則しているためか、他の作品と異なり非常に雄々しい語句が並ぶ詩歌となっている。

上述の六作が『湖北文藝』誌上に掲載された董宏猷の作品である。ここで「茅棚詩篇」(『我

們曾經年輕』）に掲載された董宏猷の文革期の詩歌と比較してみる。「茅棚詩篇」に掲載された詩歌は、上山下郷二年目董宏猷19歳のときに書かれた七言律詩に始まり、かやぶき小屋の葺きなおしを詠ったものなど、さまざまな種類がある。これらは董宏猷の身近な風景や作業の様子が描かれており、自然描写が多く取り込まれている。その一方で、七言律詩の最後の句には「熱血当洒四海内，染就旌旗面面赤。〔熱い血が世界にまかれ、染まるや旗の表は赤く〕」（p.106）と勇壮であり、文革を想起させる文言が含まれている。なかには遊撃隊や戦士の情景が詠われている作品もあるものの、全体的に猛々しい印象は薄い。つまり一部に雄々しい句が含まれてはいるものの、『湖北文藝』に掲載された作品よりも内面的で、上山下郷当時の心情が窺われる作品となっており、『湖北文藝』に掲載された作品とは趣が異なっているのである。

#### 4.3 『湖北文藝』と董宏猷

以上のように、『湖北文藝』に掲載された六作品のうち、四作が複数名による創作となっている。これは当時の集団創作とは言い難い。しかし董宏猷「茅棚詩篇」（『我們曾經年輕』）を見ると、董宏猷は生産大隊で詩歌などの創作を行っており、彼の周囲では董が詩作など文学創作を行っていることは知られていたことは想像に難くない。また文革期に創作した雑誌未掲載の作品を見ると、「公然文学」とも呼ばれる文革期に公刊された作品とは色合いを異にしていることも分かる。そのため、周囲の仲間たちと相談し、より雑誌掲載に則した作品にするための「調整」を行う必要性があったのではなかろうか。そこで董一人の作品ということではなく複数名の連名で作品を発表することになったのであろう。

ところで、これらの作品は誰が主体となっていたのだろうか。董宏猷に限らず、徐金海は1976年第2期に「采訪紅石灣〔紅石灣探訪〕」という詩歌を単独で発表し、趙国泰も前述のように74年第4期に単独で作品を発表している。しかしながら、徐金海は董との合作を含め3作品、趙は合作を含め6作品、張永柱は董との合作2作のみと考えると、董は創作において一定の役割を果たしていたと考えられる。もっとも趙国泰は文革期に活躍した青年詩人としても名前が上がっており、董と同じ6作品を計上していることから、趙との合作においてはどちらが主体だったのかを判じるのは難しい。しかしながら、双方ともに補い合う部分を有していたとは考えられるだろう。

また董宏猷の経歴を見ると、彼は“黒五類”に属する家庭の出身である。本人も“修正主義黒苗子”という批判やスパイ疑惑を受けたこともある。しかし上山下郷した場所は過酷な条件であり、その環境下にあっては董の問題は大きなものとはされず、大学進学への推薦も受けることができた。ここから『湖北文藝』においても、作品掲載にあたって董宏猷のような知青や工農兵學員といった肩書で紹介することが可能な人物に対して、その出身や歴史的背景を審査することなく、作品を掲載していたと言える。

また第二作目に肩書を変えて、「知青」であるということを強調している点から、『湖北文藝』

でも知青による上山下郷の喧伝を意識していたことは明白であろう。知識青年の表記が出るのは、1973年第2期（創刊号の次の号）からである。この号では浠水県から多くの作品が掲載されていることが目を引く。知青の作品が集中して掲載されるようになるのは、1973年第4期からで、このときは様々な地区の知青の作品が掲載されている。知青のなかで目に付くのは、浠水県と漢陽県、それに次いで随県となる。『湖北文藝』の編集部にはこれらの地区と何らかのパイプがあったと考えることが自然であるが、現段階ではなぜ浠水を始めとする、いくつかの地区の原稿が集中して掲載されたのかは不明である。所属地域が掲載されず、「知識青年」とだけ記載されるようになるのは、1975年第5期からである。

こういった表記の仕方からも、『湖北文藝』においても「知青」という肩書に一定の価値を見出しており、知青による作品を一定数求めていたと判じることができる。董宏猷は知青から工農兵學員へと身分が変わってゆくが、その作品は決して当時の文藝政策に反するものではなく、むしろ優等生的な作品となっている。工農兵學員となってからも紅衛兵から知青、工農兵學員へと変わったということを示唆する文言を作品に記載するなど、その時々求めに応じた内容の作品となっていることが見てとれる。つまり『湖北文藝』誌上で発表された董宏猷の作品は、いずれも編集部の意向に沿った形での創作と作品発表であったと言える。

## 5. おわりに

文革後半にあたる1973年に創刊された『湖北文藝』に掲載されていたのは、どのような作家であり、どのような作品であったのか。文革後に児童文学のジャンルで活躍することになる董宏猷に着目し、『湖北文藝』に掲載された董の作品を分析した。

まず董の肩書が二作目から「知識青年」であることが明確化され、それにともない上山下郷運動に参加した知青たちの暮らしや農村の人たちがいかに親しみを持って接してくれるかなど、上山下郷運動を美化したような詩歌が掲載された。三作目は知青を題材とはしていないが、やはり文革当時の“三突出”を意識した作品となっている。ただし作品からは極端な印象は受けず、当時としては平凡で印象の薄い作品と言える。四作目からは「工農兵學員」として作品を発表し、多分に政治的な要素を含んだ詩歌となり、作中には雄々しいスローガンなどが取り込まれていることが見て取れる。

董宏猷が『湖北文藝』に作品を掲載することになったきっかけは不明である。しかしながら、浠水県・漢陽県・随県から作品が多く掲載されていることから、各大隊に作品の依頼があったか、上海のように編集者がそれらの地区を回り原稿を書けそうな人物を募ったのか、そのどちらかではないかと考えられる。そうすると、大隊内で“順口溜”や詩歌を創作していた董に白羽の矢が立ったのは自然な流れと言える。

ただし董宏猷の文革期の雑誌未掲載の作品と比べたとき、『湖北文藝』に掲載された作品は

董の日常的な創作とは異なり、『湖北文藝』に掲載された作品群はその時々の方針の必要性に応じた創作を行っていることが分かる。つまり編集部の方針を一定程度受けた創作と言えるのだ。

董が“黒五類”の家庭に分類されていたことから、『湖北文藝』編集部も上海の出版状況と同じく、知青たちの家庭や出身ということにはこだわっていなかったことが分かる。当然、董宏猷の弟である董宏量作品も『湖北文藝』には掲載されており、ここからも彼らに対して政治的な審査がなかったということは明らかである。

以上が董宏猷ならびに『湖北文藝』誌上に掲載された董作品から分析できる点であるが、いくつもの課題も見えてくる。一つは『湖北文藝』に何度も登場する「浠水県女知識青年」の周阿明ならびに浠水県から多くの作品が寄せられていることから、浠水県をキーワードにした作品掲載の経緯がどのようなものであったのか、という点である。

また董宏猷と同じく『湖北文藝』にて、知識青年として作品を発表し、文革後にも活躍している熊召政の作品と掲載経緯が董と同一の傾向を有しているのか、あるいは異なっているのか。さらには熊の作品は劉益善が『湖北文藝』に掲載の作品で唯一評価しており、董との評価の差がどこにあるのかという点も見べきであろう。

その上で、『湖北文藝』全体の作品分析、とくに当時湖北で兼業作家として知られていた作家が多く詩歌を掲載しているため、この点も分析が必要である。また文革期、湖北には『湖北文藝』以外に、『芳草』の前身である雑誌『武漢文藝』が発刊されていた。この『武漢文藝』に掲載されていた作品にはどのようなものがあり、どういった人物が作品を掲載していたのか。これらを分析してゆくことで、包括的に文革時期の湖北の文藝状況ならびに作品発表条件がどのようなものであったのかを考察してゆく必要がある。これらを通して、董宏猷の作品が文革期の湖北文藝においてどのような位置づけとなるのか、この点もより明確になるであろう。

#### 〔注〕

- (1) 「文革期における張抗抗の創作活動」（『佛教大学文学部論集』第95号、2011）、「王小鷹の文革期創作活動への一考察」（『佛教大学文学部論集』第96号、2012）。
- (2) 原文は「（“文革”前期、）特別是1971年之前，湖北有價值的文學創作幾乎是一片空白」（p.173）。（ ）内は使用せず。
- (3) 湖北作家協会が配布したもので、奥付には出版社の記載はない。武漢市金星印刷廠にて1,000冊のみ印刷された。原価として25元と記載されている。
- (4) 原文は「在“文革”前期（1971年之前），文學創作幾乎是一片空白」（p.20）。
- (5) 『武漢文藝』は後に『芳草』と改名する。
- (6) 原文は「他們後來成為新時期湖北詩壇的中堅力量」（p.74）。
- (7) 原文は「十年“文革”對於湖北文學來說，無疑是黑暗的，然而如前所述，老作家和文壇新秀們在這艱苦的歲月裡積蓄著力量，春天即將來臨，湖北的文學創作爆發出盎然的生機」（“文化大革命”期間的湖北文學）『同行』p.176）
- (8) 『湖北文藝』1973年5月創刊号とする。

1949～56年、湖北文聯から『湖北文藝』(湖北文藝編集委員会、B6サイズの小冊子)が刊行されていた。編集者は湖北文藝編集委員会で、住所は武昌張之洞路129号であった。出版者は湖北文聯で、発行者は新華書店中南総分店(漢口黃興路25号)、印刷者は湖北軍区政治部印刷廠(武昌棋盤街10号)とされる。半月刊で、発行部数は1951年第4巻第3期(総号第21期)では21,000冊、翌年第7期(総第37期)では34,000冊、同第9期(総第39期)では32,000冊発行されている〔( )内の表記が異なっているのは、『湖北文藝』の表記に合わせたことによる〕。同雑誌には『長江文藝』の広告も掲載されており、湖北文聯による『湖北文藝』は本論で扱っている『湖北文藝』とは別系統の雑誌と考えられる。

- (9) 『長江文藝』の創刊号は1949年6月18日鄭州で出版された。
- (10) 原文は「〈長江文藝〉因“文化大革命”而於1966年6月停刊，1973年5月由當時的湖北省革命委員會批准，辦了個《湖北文藝》雜誌，是雙月刊，編輯部人員主要由《長江文藝》原編輯組成。《湖北文藝》辦到1978年5月，就改為《長江文藝》了，當時叫恢復，《湖北文藝》共出版32期。唯物主義地看待歷史，這32期的《湖北文藝》，應該說是《長江文藝》在特定條件下短暫的更名」(p.147)。引用部の波線は引用者による。
- (11) 原文は「〈長江文藝〉於1949年6月18日創刊，屬華中文聯領導，於黑丁、李蕓、俞林、李季4人為編委，創刊號在鄭州印刷，但編輯部在5月就到了武漢，第2期在武漢印刷。《長江文藝》是隨著解放大軍南下，在隆隆的炮聲中誕生的。(中略)《長江文藝》於1953年成為中南作家協會的機關刊物，後中南作協改為中國作協武漢分會，《長江文藝》為武漢分會的機關刊物。1985年5月，中國作協湖北分會單獨建制，《長江文藝》為湖北分會機關刊物。後中國作協湖北分會改為湖北省作家協會，《長江文藝》為湖北省作家協會的機關刊物」(pp.147,148)。
- (12) 原文は「〈湖北文藝〉自1973年5月創刊以來，已發行了十期。今年將繼續出版雙月刊。為了改進編輯工作，提高刊物質量，更好地為工農兵服務，我們懇切希望廣大工農兵讀者把你們對刊物的意見和要求，寫給我們」(『湖北文藝』1975年第1期、封入)。
- (13) 原文は「將繼續高舉毛主席的偉大旗幟，貫徹毛主席的革命文藝路線，按照英明領袖華主席抓綱治國的戰略決策，認真做好組織輔導工作，積極培養新作者，為發展繁榮社會主義的文藝事業而努力奮鬥」(『湖北文藝』1977年第4期、p.38)。
- (14) 陳齡によると、「元『湖北文藝』または“文革”前の『長江文藝』詩歌組組長」(p.192)。『湖北作家辭典』によると、本名沈灝、ペンネームは呉海など。1929年5月河南省博愛県の農家に生まれた。小中は河南省商丘・開封にて学び、48年10月より革命に参加。豫皖蘇辺区建国学院新聞系と中原大学文藝班にて学ぶ。中原大学文工団にて働いた後、49年10月中南文藝学院創作組にて文学創作を学び、50年10月卒業。中南文聯主催の『長江文藝』編集部に配属になり、“文革”によって停刊するまで詩歌組組長を任命されていた。文革期に約一年間中国作協文学講習所で学ぶ。文革後は省文藝創作室文学組組長、作協武漢分会秘書長などを経る。79年に、中国作家協会員になった。『湖北作家辭典』では『湖北文藝』の編集者として働いていたことには触れられていない。
- (15) 陳齡は「映画文学編集」(p.192)とする。『湖北作家辭典』によると、ペンネームに石上流、叮咚、赤水などがある。1934年広東省大埔県赤水郷で生まれた。1961年武漢大学歴史系の本科を卒業。湖北省作家協会に勤務する。中国共産党員であり、編集審査にあっていた。『湖北文藝』、『長江文藝』、『長江』文学叢刊の編集・作品組長を務めた後、『今日名流』雑誌社図編集部主任などを務める。報告文学や小説、散文などの作品があり、映画文学の脚本や小説などの責任編集も務めた。
- (16) 「茅棚詩篇」(『我們曾經年輕』武漢出版社、1996)によると、父親は武漢市で母親とは異なる女性と暮らしていた。董一家は父からの経済的な支援もなく、困窮した暮らしを送っていた。董宏猷が“黒五類”となったのは、この父の血筋による。
- (17) 董宏猷・董菁『扛着女兒過大江』(人民文学出版社、2001)によると、姉の名は嫻珍。董菁は董

- 宏猷の娘。1979年11月22日生まれで、中学1年生のころから作品を発表している。
- (18) 「小提琴的故事」（『扛着女兒過大江』 pp.87-90）参照
  - (19) 1966年に、董宏猷の姉は高校を卒業、董宏猷は中学を卒業、弟董宏量は小学校を卒業した。（「茅棚詩篇」『我們曾經年輕』、p.113、参照）
  - (20) 「小提琴的故事」（『扛着女兒過大江』 pp.91,92）、「茅棚詩篇」（『我們曾經年輕』、p.113）参照
  - (21) 「茅棚詩篇」（『我們曾經年輕』 pp.118,119）参照
  - (22) 「茅棚詩篇」『我們曾經年輕』参照。「茅棚詩篇」には上山下郷中に董宏猷が創作した詩歌などが多数掲載されている。また妻の手による手抄本の存在についても触れられている。
  - (23) 「教室里長大的孩子」（『扛着女兒過大江』p.13）参照。「茅棚詩篇」（『我們曾經年輕』p.119）によると、妻である易英文は董宏猷の前年73年に武漢師範学院中文系に進学している。
  - (24) 「茅棚詩篇」『我們曾經年輕』 p.113、参照
  - (25) 原文は「幾乎只要董宏猷在場，就有笑聲和歌聲，就有友誼，就有溫情，就有拔刀相助，就有豪氣沖天」（「我認識的幾個武漢人」『武漢人』 pp.147,148）。
  - (26) 「我認識的幾個武漢人」『武漢人』 p.147、参照
  - (27) 董宏量「青春如詩」（董宏量主編『武鋼文學史話』中国廣播電視出版社、2003）参照
  - (28) 同上
  - (29) 原文は「兩個在長江邊拉板車的孩子，後來“拉出”了許多詩歌」（『扛着女兒過大江』 p.62）。
  - (30) 原文は「我是當知青時學習寫詩的，因下放的地方吃不飽飯，知青們都被派修水利、修鐵路」（「青春如詩」『武鋼文學史話』 p.80）。
  - (31) 『武鋼文藝』は1964年に創刊し、文革期中断を経て75年に復刊した。80年には『武鋼演唱』と一つになり、文学・戯劇・曲芸などを掲載する総合雑誌となった。
  - (32) 徐金海は1946年11月22日生まれ、湖北省漢陽県出身。中学修学後、家業である農業に従事し、生産隊長も務めたことがある。1972年、漢陽県楚劇団で脚本を担当するようになる。脚本や組詩を発表したことがある。（『湖北作家辞典』 p.233、参照）
  - (33) 『湖北文藝』 1974年第1期、p.40
  - (34) 『湖北文藝』 1974年第3期、p.56
  - (35) 原文は「不要成天為個人著想，資本主義那條路是走不通的，要跟著貧下中農一起走社會主義的金光大道！」（『湖北文藝』 1974年第4期、p.32）。
  - (36) 趙国泰は、1950年陰曆の3月30日生まれ。湖北省漢陽県（現、武漢市蔡甸区）高廟郷独山村の出身である。1966年、中学卒業後、故郷に戻り、農業に従事するようになる。77年、華中師範学院（現、華中師範大学）を卒業し、大学に残って教鞭をとる。84年に、長江文藝出版社に異動になり、編集を担当するようになる。作家としては、業余で文学創作を行っている。また20年以上に亘って理論研究を行っている。（『湖北作家辞典』 pp.194,195、参照）
  - (37) 張永柱は1949年12月に湖北省恩施で生まれた。幼児期から両親の仕事により、四川・湖北の山岳区を渡り歩いた。江城万県市で少年時代を過ごした。高校時代から詩歌の創作を始め、発表も同時に始める。その後、知青になり、華中師範大学中文系に入学する。卒業後は鄂西報社に入る。副刊の主編などを務めた。湖北省作家協会会員、中国郷土詩人協会理事。（『湖北作家辞典』 pp.122,123、参照）
  - (38) 『湖北文藝』 1975年第3期、p.9
  - (39) 同上
  - (40) 『湖北文藝』 1976年第2期、裏表紙扉

（せべ けいこ 中国学科）

2014年11月17日受理